

# 横浜市の「研究開発学校」における小中一貫英語教育の効果検証結果

## — 平成20年度文部科学省研究開発実施報告書より —

平成20年8月に学習指導要領が公示され、小学校では第5学年及び第6学年に外国語活動が新設されました。それに先立ち、横浜市では、平成18年度からの3年間、市内小中学校5校ずつ計10校が文部科学省から「研究開発学校」の指定を受け、小中学校9年間を見通した英語教育の在り方について実践研究を進めました。

### 1. 研究概要

小学校5校及び当該小学校から進学する中学校5校において、地域の子どもの特性や 目指す子ども像をふまえ、コミュニケーション能力の基礎の育成を中心とした小中一貫教育の在り方について研究を行い、指導内容や指導方法等の違いによる英語力について検証を行いました。

- ・小学校： 全学年で「英語科」を新設し、中学校3年間の英語教育との連続性をふまえた、学年段階に応じた目標設定、指導方法や指導内容についての研究
- ・中学校： 外国語（英語）科の授業を全学年年間140時間実施し、小学校に教科としての「英語科」が新設された場合の、中学校における目標設定、指導方法や指導内容の工夫・改善についての研究、及び小学校に「英語科」を導入したことによる、英語力に関する効果の検証

### 2. 主な成果と検証結果

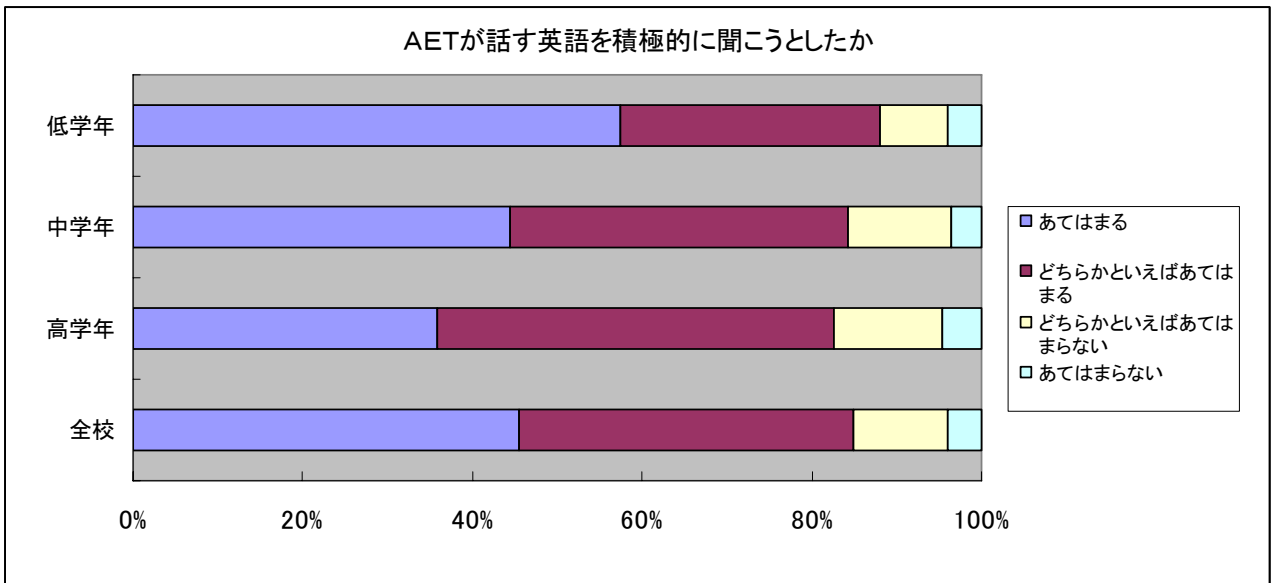
研究開発学校では、児童にとって外国語活動の時間は特別な意識で臨む時間ではなく、学習の一部として認識されています。このことは児童に対して行った意識調査の結果からも窺われ、「英語活動は楽しいですか」という問いに対して、全校で約90%の子どもたちが「はい」と答えています。さらに、その理由についても、単に「歌やゲームが面白い」というだけでなく、「英語で自分の考えを表現できたとき楽しい」「AETの先生の感覚が感じられて楽しい」といったものが挙げられています。

また、学年が上がるにつれて、「英語が使えるようになるから」「外国のことが分かるから」「将来役立つから」といった、楽しさ以外の要素を見出している子どももいます。

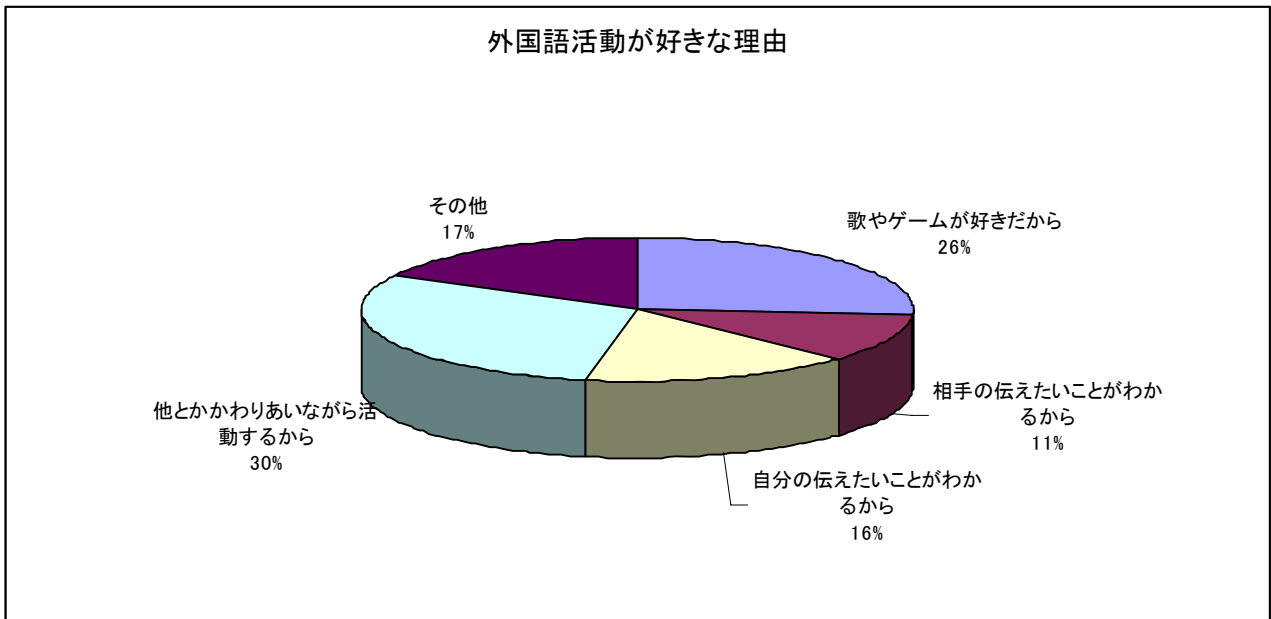
中学校では、文字が本格的に導入されること、文法的な理解が求められることから、近隣の学校に行ったアンケート結果同様、「英語学習が難しくなった」ととらえている子どもが多くなります。しかし、学習のねらい等の理解が深まっていることから、「外国の人とのコミュニケーション手段として英語を学習する必要がある」等の意識が現れ、意欲は確実に強まっていることが窺えます。

【小学校意識調査】

「AETの英語を積極的に聞こうとしたかどうかの質問に対する外国語活動経験児童の回答」

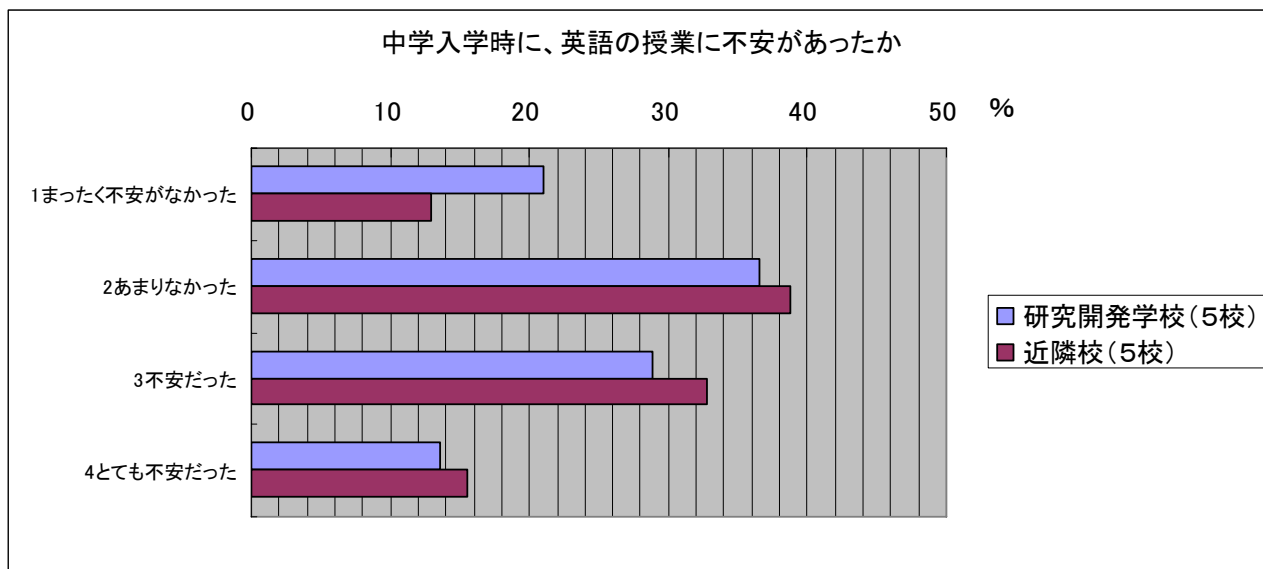


「外国語活動が好きな理由を問う質問に対する外国語活動経験児童の回答」

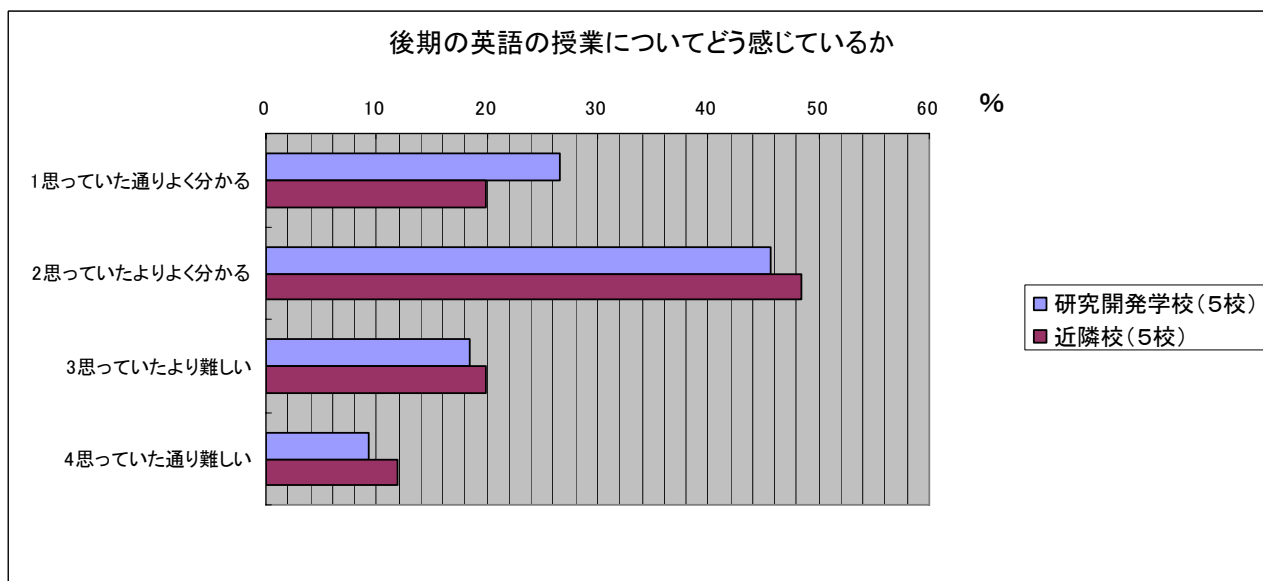


## 【中学校意識調査】

「中学校第1学年における外国語活動経験生徒と未経験生徒の外国語学習における意識の比較Ⅰ」



「中学校第1学年における外国語活動経験生徒と未経験生徒の外国語学習における意識の比較Ⅱ」



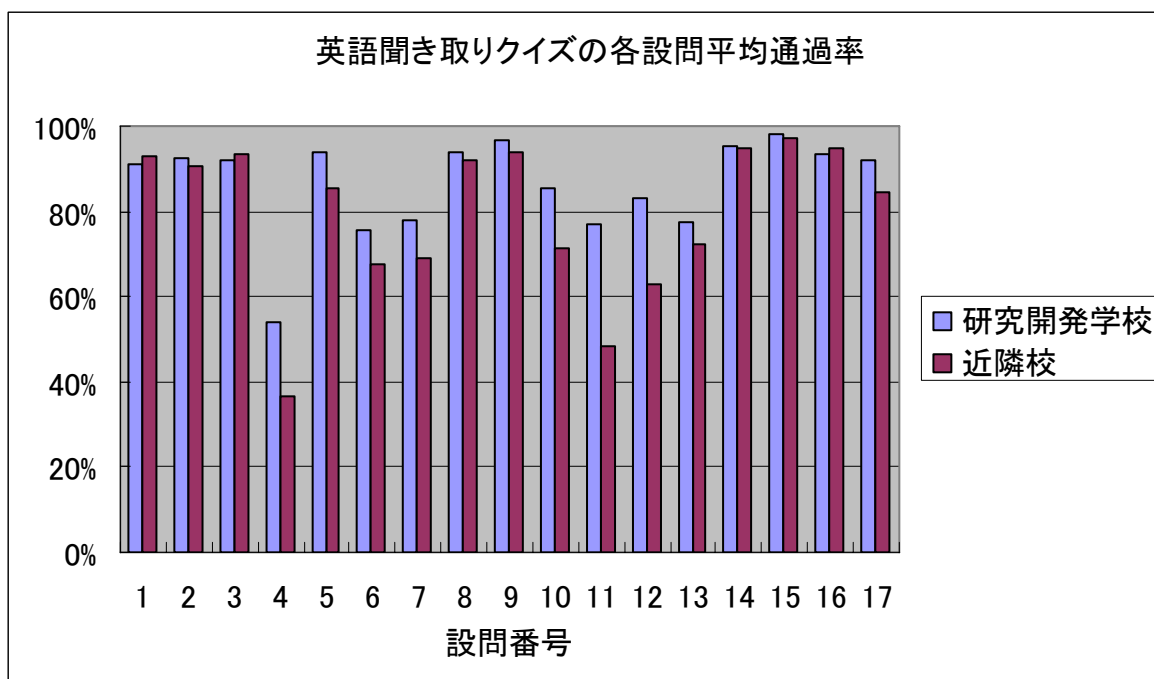
「英語聞き取りクイズ」は、音声を中心としたコミュニケーション活動に慣れ親しんでいる小学生を対象にしているため、放送による英語の音声を聞き取り、問題用紙の絵の中から適切なものを選んだり、正しいやり取りをしている会話を選んだりする問題で構成されています。

研究開発学校の児童と近隣の学校の児童の通過率を比較すると、いくつかの問題では研究開発学校の児童の通過率が大きく上回っています。また、問題の一部は、過去に実施された「横浜市学習状況調査中学校第1学年」の問題と同じものを使用しているため、研究開発学校の児童と中学1年生の通過率との比較も行いました。その結果、小学校段階で馴染みのない表現を使っている問題では、中学生の通過率の方が高かったものの、外国語活動で使われている表現を使っている問題では、両者に大きな差は見られませんでした。

これらの結果から、AETとの触れ合いなど、英語の音声によるコミュニケーションに児童が無理なく慣れ親しんでいることが、英語を聞き取る力を身に付けることにもつながっていることが分かります。

## 【小学校英語クイズ・横浜市学習状況調査（中学校外国語科）】

「小学校第6学年における外国語活動経験児童と未経験児童の英語聞き取り能力比較」



「小学校6年生（外国語活動経験児童）と中学校1年生の英語聞き取り能力比較」

